

チェルノブイリの子どもたち



チェルノブイリ子ども基金 NEWS No. 93 2013年6月22日発行
郵便振替口座 「チェルノブイリ子ども基金」 00160-4-98316

チェルノブイリ27周年救援キャンペーン 「チェルノブイリと福島の子どもたち」



木村 真三



広河 隆一



「弦楽四重奏団オブリジェ」

絵画・写真展（4/8～4/10）は3日間で519人の来場者がありました。講演会（4/26）は事前申し込み人数がなかなか増えず心配していましたが、365人の来場者があり、会場は満席となりました。ご来場いただいたみなさま、まことにありがとうございます。当日は、舞台監督・舞台補助・受付・物品販売・来場者の案内・絵と写真の飾り付け・荷物の運搬などを、約40人のボランティアのみなさんにご協力いただきました。長年関わってくださっている方、今回初めて参加された方、年齢も職業もさまざまな方々が集まり、このイベントを支えてくださいました。子ども基金の事務局は少人数で運営していますので、ボランティアの皆さんのお力なくしてイベントを成功させることはできませんでした。本当にありがとうございます。

来場者の感想

◆自分は東日本大震災をTVでみてその後の原発事故を知った後は大きなショックを受けました。今日ここに来てみんなが描いた絵を見て「自分のふるさとを悪く思わないでほしい」「自分の家に帰りたい」と願っていることがわかりました。これを見て自分は、原発は本当にいらぬことがわかりました。近い将来放射能がなくなることを願っています。（10代男性）

◆子どもの絵とは思えず素晴らしい…原子力は確かに便利だけど、効率ばかり求めることは良くないと思う。人や生活、一番大事なものを破壊してしまう恐れのあるものだから。（30代女性）



27周年救援キャンペーン
報告は次頁に続く

家族保養 5/20～5/31
(本文12頁に報告)

「チェルノブイリと福島」講演会 ～子どもたちの未来のために今できること～



木村真三 獨協医科大学准教授 (前編)

＜チェルノブイリ原発事故から 27 年目＞

チェルノブイリの人たちは、たくさんの方が生じているなかで暮らしています。テレビなどでは、病気をもった子どもがたくさんいて、立ち上がれない状況があるという報道がありますが、私が見た限りは、正直、メディアの方々が強調し過ぎているということも感じます。

＜ベラルーシ、ウクライナの国情＞

ベラルーシのルカシェンコ大統領は旧共産圏に戻ろうという考え方で進めています。ロシアとウクライナに挟まれ、かつ、ガス・パイプラインが通るベラルーシは、エネルギー、ガスの供給をウクライナとロシアに依存していますので、なんとかしてエネルギー供給に左右されないような、独自の路線を歩もうとしています。政策の一つとして、原発を作り、エネルギーを安定供給するという政策を打ち出しています。その結果、チェルノブイリ原発事故による影響を、何もなかったことにしている。こういった、ベラルーシの国情が話題にのぼることは、あまりありません。

いま文科省の委託で、チェルノブイリ事故後影響評価を行っています。まだ公開されていませんが、その評価委員として (2013年) 2月いっぱいにはウクライナをメインに、チェルノブイリ被災地にいました。ベラルーシへは、体調を崩して行けませんでした。

ベラルーシに行った委員からは、一部の子どもたちの甲状腺がんや事故処理作業員の白血病はあったが、その他、影響らしいものはない。一般人の白血病についてはほとんど影響はなかったという報告を受けています。しかし、本当のところはどうか。それは、みなさん、懐疑的に思ってください。

ウクライナでも、一生懸命に調査をしている科学者、その状況を目にしている人びとは、何かし

らチェルノブイリ事故の影響は出ていると発言しています。

他方、IAEA (国際原子力機関) の御用学者がいます。彼らは、ウクライナでは一部の小児甲状腺がん、そしてリクビダートル (事故処理作業員) の白血病と白内障という形でしか、事故の影響は現れていないと、はっきり言っています。

御用学者の言い方というのは断定です。しかし、科学に断定というものはあり得ません。科学というのは、あるかもしれないし、ないかもしれない。でも、そのあるかないかをきちんと確かめていくことであると、私は認識しています。そのような中で何が見えて来たかをお話していきたいと思えます。

私は「市民科学者養成講座」と銘打っていますが、今日もその養成講座として、一つだけみなさんにお願ひがあります。今日、見聞きした話を、この場に来られなかった方々にお伝えください。私一人がいくら話をしても、伝わっていきません。でも、こうして来てくださったみなさんが何を感じて、どう思ったかを伝えていくのが、市民科学者の役目であり、あるべき姿だと思っています。

＜シーベルトとベクレル＞

ベクレルは、アンリ・ベクレルという科学者がウランの天然鉱石をたまたま写真甲板に置いたところ、はっきりとそのウラン鉱石の形が見え、天然の鉱石の中には、放射線を出す物があるということを見つけてノーベル賞を受賞したことから、敬意を表してつけられました。

ベクレルは放射能を表す単位で、1秒間に放射線をいくつ出すかで決まってきます。例えば 50 ベクレル。子どもは食品中に 1 キログラムあたり 50 ベクレル以上の物は食べてはいけなないとされています。50 ベクレルとは、1秒間に 50 個の

放射線を出すという単位で、100ベクレルは、1秒間に100個出すということです。

次にシーベルト。理解するのが難しいのには2つの要因があります。一つは放射線の種類で影響が異なるということです。ガンマ線、ベータ線を1とした場合、アルファ線は影響が20倍大きいと言われます。

ラドンとは、希ガス物質のアルファ線放出物質です。ウランやトリウムなどから出て来る放射線核種の一種で、ウランやトリウムからラドンが壊れて出てくるとき（崩壊するとき）にアルファ線を放出します。

2つ目は、臓器によって受ける影響が違うからです。臓器により感受性は異なり、放射線によって攻撃された場合、その傷つきやすさは大・中・小と3つに分かれています。

影響が大きいのは、骨髄（白血病になる原因）そして直腸。広島や長崎の原爆で被ばくされた方は、下血しながら亡くなっていったという話を聞きます。腸の腸壁細胞が放射線に攻撃されるとズルズルと剥け、剥けた後には体液が逡巡してくる。体液はリンパ液に血液が混ざっているのだから、あたかも血液が流れてきたように見えるので、下血と感じられるのです。

次に胃や肺、乳房。女性の乳がん検診の一つにマンモグラフィという検査がありますが、これは乳房にエックス線をあてて検査するものです。それによってがんを見つけるというのですが、逆に言えば、がんの危険性も増す。両刃の剣となっているというのが事実です。

その他、筋肉や神経は放射線があたっても、それほど影響は出ない。

中程度に影響を受けるのは生殖腺や肝臓です。しかし、奇形が生まれるのは生殖腺が被ばくした影響ではなく、むしろ遺伝的影響によると言われています。奇形というのは突然変異と誤ってくださ

放射線遺伝学の中では、遺伝的影響は数十世代以降、早くても5世代以降にならないと現れないということは常識です。本来は、放射線遺伝学の先生方にお話いただくほうが良いのですが、彼ら

は攻撃されるのを嫌がって口をつぐんでいます。

放射線の種類によっても違い、各臓器の感受性によっても違う。これらをすべて調べて、計算して出すのが、本来のシーベルト値です。非常に奥が深くて難しいものです。

放射線には直接的、間接的、それぞれの効果があり、正式には「電離放射線」といいます。飛んで来る放射線を遮るような物質があって、電子をはじき飛ばす。このはじき飛ばされた電子が細胞やDNAを傷つけるというわけです。

私たちの体は大量の放射線を浴びてしまうと、（自己で）治すことがなかなか難しくなっています。体の中には間違えたDNAを元に戻したり、壊れたものを修復する優秀な大工がいるのですが、一度にたくさんの箇所が壊されると、その壊れたところを何がなんでも修理しようとして、かえって間違えた修復を行ってしまうということがあります。

正常な染色体は、XとYで構成されています。Y染色体は、性染色体として男性しかもっていません。女性はX染色体だけです。XでもYでも、つなぎ目は一つのはずですが、たくさんの放射線を浴びた場合、例えば、6グレイ（6000ミリシーベルト）ぐらいを浴びた場合は、つなぎ目が3カ所になったり、大きな染色体になったり、つなぎ目がなくなってしまうたり、「こ」の字形になってしまうなど、染色体の形が修復の際に「ミスマッチ」を起こす。こういった間違えた修復ががんにつながっていきます。

<放射線の影響はまだまだわかっていない>

2010年3月に、ある特定領域についてですが、アメリカ人の男女の遺伝子の解析が終わりました。その結果、どんなに健康な人でも、欠陥がある遺伝子が1個や2個は存在するということが判明しました。

何らかの形で子どもに障害が現れて生まれてくる場合は、胎児期にたばこを喫う、飲酒する、あるいは放射線にあたるということも影響するのかもしれない。すべての要因に対して一切の完璧な人はいないということが明らかになったと報告

されています。

放射線の影響というのは、まだまだわかっていません。今回、福島の子どもたちに甲状腺の異常が出てきました。これだけの出現率は、放射線の影響ではないかと、私は思います。その原因になるようなことをいくつか、いま論文にまとめようとしています。

医学者として、医学者の中で闘いをするときには、同じ土俵の上で闘わねばならない。ですので、それを発表してからお話ししますが、福島で起きている甲状腺のがんは、この福島原発事故が要因ではないかと考えています。

<福島第一原発事故とチェルノブイリ原発事故の違い>

もうひとつ知っていただきたいのは、福島第一原発事故とチェルノブイリ原発事故の違いです。これはまったく同じではないのだということです。

まずは、爆発の違い、原子炉燃料の飛散の違いです。

福島原発事故は水素爆発で、チェルノブイリ事故は水蒸気爆発です。この水蒸気爆発により、チェルノブイリでは核燃料が大量に飛散しましたが、飛散に関して言えば、福島は少なかった。しかし、原子炉が壊れて、海に出た核燃料がどのくらいかは想像もつきません。陸地の部分で言えば、わずかもかもしれませんが、海の部分は未知です。

セシウム 134 と 137 の放出の割合が、チェルノブイリと福島では違い、またストロンチウム 90 の放出量が、陸地に関しては福島ではわずかで、チェルノブイリでは大量である。

でも、海洋汚染についてはわからない。これが現状です。

压力容器の中には燃料集合体というのがあり、その中には燃料棒があります。その1本1本を覆っているのが、ジルコニウムという金属です。通常であれば、压力容器は圧力がかかっているの水は 100℃でも沸騰しません。クルクルと循環しながら冷却をしています。280℃では、ジルコニウムと水はまだ反応しません。しかし、今回のように全交流電源喪失という事態に陥ると、この循

環システムは壊れ、空焚きの状態になります。どんどん熱暴走が始まりますが、900℃以上に達すると、ジルコニウムと水は反応し、酸化ジルコニウムと水素に分かれます。

この水素が濃度的に4%になったとき、压力容器内の酸素と再結合して水ができます。このときに、大量にエネルギーが放出されて大爆発をした。これが水素爆発の原因であると言われています。

チェルノブイリ原発原子炉の状況については、空中爆発説というのがありますが、私はこれももっとも信用できる分析だと思っています。資料は京大原子炉実験所の今中哲二さんが作成されたものを使わせていただいています。ロシアの科学者チェチェロフさんという方が2005年に発表しました。

最初、水素爆発が少しだけ起き、これが起爆となって原子炉燃料が溶け始める、つまりメルトダウンが始まります。これによって冷却水と燃料棒が触れ合うと、大量の水蒸気が発生します。これが、150トンとも言われる燃料棒のついた釜のふたをグッと持ち上げた。その高さは20メートル以上にまで達したそうです。

その際、原子炉建屋の上部を壊し、大量の熱い空気は一気に外に出て、冷たい空気が流れ込んでくる。そのときに、燃料棒がくっついたフタはクルッと方向を変え、空気中の大量の酸素と触れて大爆発をした。これが空中爆発説です。

大量の核燃料物質が放出されましたが、一番遠くに飛んだのは私が知る限り、3000キロ離れたパリでプルトニウムの粒が確認されています。

福島第一原発の事故では、压力容器に穴は空いたけれども壊れず、不幸中の幸いで爆発しなかった。建屋は壊れたが、大量の核燃料が陸地に放出されることなく収まったのではないかとされています。

1998年、事故から12年経ったときのヨーロッパの汚染地図に日本列島を当てはめてみると、どれだけ広範囲の拡散があったか、チェルノブイリはいかに大きな事故であったかということがわかります。

＜チェルノブイリ事故によるがん死者数の見積もり＞

IAEA フォーラム（2005）では、60 万人を対象集団として、チェルノブイリ事故に由来するがん死者数は 3940 人と発表されました。しかし、これはあまりに過小評価であると、同じ国連機関の WHO から批判され、後に 9000 件に訂正しています。

WHO 報告（2006）では、被災 3 カ国 740 万人を対象集団にして、9000 人と報告しています。IARC（国際がん研究機関）のまとめでは、ヨーロッパ全土で、5 億 7000 万人に対して、1 万 6000 件にがん死が増えたのではないかと述べています。

キエフ会議報告（2006）では、全世界で 3～6 万件と発表しています。おそらく 5 万人程度だろうと、今中哲二さんは見積もっています。

私自身は、がん死者数の見積もりをしていますが、こうして眺めるだけでも、これだけの違いが出て来る。その原因は、対象集団という母集団が違うからと考えられます。

＜ウクライナのナロジチ地区で WBC 測定＞

私はウクライナのナロジチ地区を中心に調査しています。今現在は、1 か月の 3 分の 1 から半分くらいをウクライナで、残りを福島で過ごしています。

ナロジチ中央病院で掃除の仕事をしている 57 歳の女性を WBC（ホールボディカウンター）で測定（2012 年 11 月 10 日）。彼女の体重は 97 キロ。29,860 ベクレルという内部被ばくをしています。これが事故から 26 年経った現状です。

さらにショッキングなのは、森林関係の仕事をしている 19 歳の青年。なんとセシウム 137 が 50,168 ベクレルと、5 万ベクレルを超えています

（2013 年 2 月 10 日測定）。彼はアパートに一人暮らしで、自炊はしていないけど、きちんと食事はとっているそうです。森できのこがいっぱい採れるけど、それを同僚と一緒に食べたりしていない？ と聞いたら、食べていると。だから、これだけ高い値が出るのです。事故から 26 年経っていても、森のものには気を使わなくてはいけな

い、これが現実です。

ナロジチ中央病院に WBC を持ち込み、あわせて食事調査も行います。陰膳法という方法で、内部被ばくを調査しています。この 2 つは特殊な例ですが、このときの調査でも、セシウム 137 の平均値は 3000 ベクレルを超えました。

私はいま、二本松市で測定をしています。二本松市民で放射線の内部被ばくが見つかっているという方々は、500～1000 ベクレル以下です。

1000 ベクレルという数字をどう考えるか。もちろんゼロベクレルに近づけるべきですが、1000 ベクレルが検出されたというだけで、急性障害や、長い年月を経て病気が出て来るかという、ほとんど出ないだろうというのが私の考えです。

人間の体には、カリウム 40 が、天然で存在します。これが身長 167 センチ、体重 60 キロの男性であれば、4000 ベクレルと言われています。その他、他の放射線核種も含まれていますので、全体で 7000 ベクレルくらいの放射線を体の中から発しています。その中で、1000 ベクレルは劇的な変化をもたらすわけではありません。

＜放射線の影響＞

放射線の影響というのは、放射線が飛んで来るのを遮っている状況で、電子にあたって、電子が飛び出す。それによつての害ですから、これは天然であろうが、人工放射線核種であろうが、その影響に違いはまったくなく、害を及ぼします。

事故後 2 年間、9000 名を超える方々を測定した結果として言えることですが、急性初期被ばくを除けば、食品に関しては、福島県内では比較的控制がうまくいっていると言っているでしょう。

一方で、内部被ばく者が増えているという状況もまたあります。事故から 1 年、2 年と経つにつれ、みんなだんだんと放射能のことを忘れていきます。忘れることは、先ほどのきのこを食べているチェルノブイリの男性のような状況につながっていきます。そういうことに警鐘をならしています。【次号につづく】

広河隆一 講演 DAYS JAPAN 編集長・球美の里理事長（前編）

僕は楽観的ではありません（注）。それから危機意識も持っています。だから、ここに立つというのを引き受けています。ただ心情的にということではなしに、なるべく自分が体験したことを話したいと思っています。

~~~~・>~~~~・>~~~~・>~~~~

この27年間いろんなところに行きました。これがチェルノブイリ原発です。先ほど話に出たコロステンはこちらです。煙はこちらの方に流れていって、途中で風向きが変わったように見えます。そして、木村さんが話されていた地域、ここにオブルチがあって、ナロジチはこの赤いところにあります。そのような場所で何が起こったのかということは、事故から3年間極秘事項になっていました。それでどうもこの30キロ圏だけじゃないらしいと、汚染されたのはもっと広い地域らしいということが、ささやかれ始めて、それを調べた地元のジャーナリストもいたのですが、その発表は禁止されていました。そして、外国人のジャーナリストたちもそのことを聞き、モスクワで待機していました。ちょうど事故から3年たったその頃、空気が少し変わり始めて、変わり始めたときに僕がちょうどこのチェルノブイリの取材をしていました。このあたりのそういう隠されていた汚染の村に行くという、そういうような許可申請をKGBに対して毎日出していました。それで最後に許されて入ったのがナロジチ地区です。その時、西側のジャーナリストとして初めて入ることになりました。そこがどんな状況かということは全く僕は知らなかったんですね。コロステンもそうです。コロステン地域あるいはナロジチ地域は安全宣言を出される。そういうところは人が住んでいってことになりました。そしてオブルチ地域も安全地域としてこのあたりも人が住むことが許されている。安全だと言われた地域でどういうことが起こっているかということを探るために行きましたけども、そこではむしろ病気が多発している。子どもの病気が多くなっているということを知りました。例えば、日本でもいろんな村とかそ

ういうようなところで、あるいは一つの村が3つくらいに分けられて、この辺りは大丈夫だけど、その隣は立ち入り禁止になっているということと同じなわけですね。そういうことがいかに破綻していったかということを示すように、現在病気は続いています。もう発生するはずないと思われていた甲状腺がんに関しても増えている。そんなわけではないはずです。なぜかといったら僕らが聞いている限りの甲状腺がんは放射性ヨウ素が原因だと。放射性ヨウ素の半減期は8日間、しばらくすれば消えてなくなる。だからそのあとで増えるわけではないとそういうふうに言われました。そういうような今までの知識を当てはめようとして失敗するような事態というのがいっぱい起こってきています。放射能のことっていうのは我々ほとんど何も知らない、専門家なんかほとんど知らないというのが言われてきています。

今度、6月8日に中野ゼロホールで、北海道がんセンターの名誉院長、西尾さんの講演会を開きます。病気と放射能の関係というものが、いわゆる今までの権威者たちが「これはこうなんだ」ということを言っていた、そのことがどういう間違いをおかしてしまったのか、それはなぜなのか、というようなことを話してもらう予定です。セシウムというのは半減期が30年もある、体の筋肉とかいろんなところに付着していくけれども、最近の研究では甲状腺にもセシウムが影響する。その被曝によってチェルノブイリでは今も続いている甲状腺がんの原因になっているのではないかと、危機感を持っている学者たちが言い始めています。

この雲がこう流れたときにコロステンの辺りのこの村にいた家族のお父さんは、事故から7、8年後にがんで亡くなりました。同じころに娘が発症しました。娘はその時10歳くらいだったので、娘の病気はまず甲状腺がんになって、やがて白血病の病気になりました。事故の時はここにいて、その後でしばらくしてからキエフに住むようになるのですが、その時最初に吸い込んだ、あるいは浴びた放射性物質によって彼女はいろんな

病気になっていくわけです。一時はもう余命が数年というようなことを、医者に言われたりしました。僕はずっと長い間その家族と付き合うことになりました。その話はまたあとでします。

ものすごい村々が消えていきます。僕はそういうところで458の村の撮影をしてきましたけれども、その撮影を手伝ってくれた人たちの過半数ももう亡くなっています。全員が40代から50代くらいまでにがんで亡くなっています。そんな状況です。だけどそういうようなことはほとんど記録に残りません。

これはプリピャチという町です。最初の頃はプロメテウスの像がプリピャチの街の真ん中にありましたが、やがてこの像はチェルノブイリ第一原発の前に置かれるようになります。ここの現在の放射線量は、大体今の日本の福島県で安全宣言を出されている量と同じくらいです。

この女の子は先ほど言いました安全だと言われた所で、それで住み続けることになって、そしてそこで大丈夫だということで、そしてこの子は鼻のところにがんが発生して、何十回という治療を受けています。これは数年前に撮ったものです。その頃集中的にそのあたりを回りましたが、病気が非常に多く驚きました。これは事故が起こった最

初の頃は何が起こっていたのか。放射能汚染地域が非常に広がっているということを最初にあげたのが左の現地のジャーナリストです。「モスクワニュース」のジャーナリストでした。そして彼自身が被曝して病気になっていきますけれども彼の書いた原稿は半年間発表が禁止され、そのため1989年2月末ぐらいまで、このニュースは伏せられることになりました。そのことに対して、人々の不安がどんどん募って行って、いろんな集会などが起こりますけど、「本当のこと知らせろ」

という大集会で、発言者たちのマイクの電源が急に切られてしまうということがあって、自分たちのドキュメンタリーで「マイクロホン」というようなタイトルをつけた映画がありました。つまり本当のことを知る権利から全部遠ざけられてしまっているという状況にあったわけです。

右側の人が「ジャーナリストたちはうそを言う、大げさに言う、だけどそれらは本当の事じゃないし、それから彼らがインタビューして発表するのでもいい加減な医者で、町医者が本当のことなんか分かるわけではない」と言っている原子力医学の権



威者です。日本でも全く同じような状況です。しかし彼が言ったりしている人たちは実際に臨床医たちですから、病人たちに対して向き合う人たちで、彼らは机上でデータを集めるばかりの人間です。こういう人がその時には権威を持っていて、病気の数とかそういうようなものをコントロールする人間だったわけです。これは、そういう病院で新聞記者の方が入院していた時に、向こうで会いました。彼が最初に入った村のことはたった一つの小さなニュースしか出

なかった。そのあと僕は村の周辺一帯に入っていたわけです。

事故の時にプリピャチにいた人たちの写真です。プリピャチにいた時に事故が起き、そのときお腹が大きかった。そしてやがて赤ちゃんを産んだ時の記念写真を撮りました。この時に医者たちは中絶を勧めましたが、自分たちは生みたいと言って生んだ。ここに写っているタチアナ・ルキナさんがチェルノブイリ救援運動を始めた一人です。女性たち、お母さんたちの運動が中心になって市民の救援運動が始まっています。それと同時にリクビダートルという原発作業員たちを救援する運動、日本ではまだ原発作業員たちの救援運動は起こっていませんが、お母さんたちから政府に詰め



寄る運動というかそういうのが、初めてこの問題の深刻さということ伝えていきま。結局こういうなお母さんたちの動きが政府を動かしていくという構造になるわけ。だから政府を攻撃する、批判する、それから裁判を起こす、闘う、それも非常に重要な闘いで、やらなきゃいけないけど、それだけに自分たちは任してはおけない。その間に子どもたちはどんどん被曝していくわけですから、守るためにはもっと他にいろんなことをやっていかなければいけない。彼女自身は、この時妊娠中の自分が、原発が爆発したところを自分の家から見えたから、それを見物してしまったということから、もう何十回と会っているのですが、会う度に涙を流して、そのことを悔い、残念がるというか、何故あんなことしてしまったんだろうと言います。彼女の赤ちゃんが今25、6歳になっていますが、彼女があらゆる種類の腫瘍におかされているという状況になっています。これは彼女の家に一緒に行った時の写真ですが、壊れたピアノだけが残されていた頃。その次に行った時にはもう何も残されてなかったのですが。

これは別のお母さんたちが、事故後初めてリストを作って、どの子がどんな病気だったか調べて、それで世界中に発信するというのもやっている。しかしチェルノブイリの救援というのは、海外から外貨を獲得するというチャンスでもあるのです。それに目をつけて、とにかく事故を自分のチャンスと考て、一儲け企もうというような運動もたくさんありました。日本の復興資金がどこに流れているかと考えれば、だいたい同じようなことが向こうでも起こっていたわけです。

これは、クラスノポリエというところの、救援運動の中心になった一人の人で、小学校の校長先生です。この人のところに、我々は最初の大きな救援物資として食品測定器を持ち込んで、彼の校長室が測定室になるということがありました。それから我々の持ち込む医薬品も、最初は「基金事務局」という名前で90年ぐらいに始まって、91年に、子ども基金という名前でするんところからコンテナ何台もつなげて送る、そういう救援活動

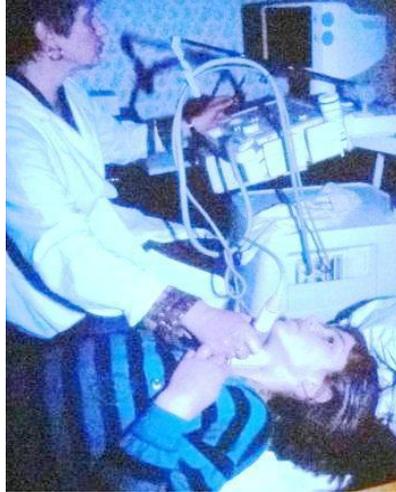


が必要になってきました。これは事故からもう7・8年も経った後なんです、

原発から60キロ北に行ったところの町で、ミルクを測っているところです。「これで安全なんですか」って聞いたら「これでは全然安全とは言えません。なぜなら我々はセシウムを測っているけれども、つまりガンマ線を測っているけれども、ベータ線やアルファ線は測っていないからです。ストロンチウムやプルトニウムがどれくらいあるか、全くわかりません」と検査の人は言っていました。だけど、ここであるレベルを通過したようなミルクは、バターやチーズに加工されて販売されている、その時はそういう状況でした。

この間、日本にドロズドさんというベラルーシの甲状腺の専門家の第一人者が来ました。これはドロズドさんが甲状腺がんの検診をしているところ、彼女はアクサコブシナという研究所の指導をやっていましたが、彼女自身がやがて危機を煽るとか、大変な状況を外に知らせるとか、そういうことを罪とされて、そこから追放される形になりました。彼女がやったことは何かというと、1989年にまず彼女の上司から、汚染地に行けと命令されます。そして子どもたちの甲状腺を調べろと。それでエコーの検査をした。のう胞が見つかる。初めて彼女が出会うわけです。その時チェルノブ

イリで出たのう胞というのは、福島よりはるかに少ない数です。だけど、そのことで彼女はびっくりして、やがて、そこの中から結節、つまりしこりが見つかっていって、やがてどんどん小児甲状腺がんが発症するという事実に出会っていくようになる。一番の現場



のところにいたのはこの人です。1989年90年と、どんどん高まっていく。90年から91年にかけてIAEAは、そんなこと心配ないというために国際調査団を派遣します。IAEAはつまり「安全だ、心配ない」というためだけに派遣します。ドロズドさんのインタビューとか、実際の検体なんか調べると、そういうこともあり

ました。だけど、その結果を見て彼女たちはびっくりするわけです。なぜかという、1991年の5月に発表された報告書の中には子どもたちには甲状腺がんは発生してない。しこりもない。そういう重篤な病気がこれから増える可能性もほとんどないということが書いてあったわけです。調査した被災地の物は何を食べても大丈夫、水を飲んでも大丈夫、みんなが怖い怖いと思っているから心理的にストレスが高じて病気になるのだ、というように書いてありました。それに対して住民たちはすごく怒ったわけです。

なぜ、4歳とか3歳とか2歳とか、小さな子どもたちが放射能のストレスで病気になるんだ、放射能なんか理解のしようがないのに。どうして動物たちが病気になるんだ、ってすごく怒ります。だけどその安全宣言が国際的に広まると、そういうことがあります。ちなみにその代表というのが、あの重松逸造氏という広島 of 学者です。広島 of 学者と長崎 of 学者が日本の被曝というものを、あるいは原爆の後の疫学調査をしたという経歴を元に、こういうところでどんどん起用されていき、そして原発推進派にとって、IAEAにとって都合のいい言葉だけをどん

どん発するようになっていくわけです。そのことによって、子どものたちの病気の発見が遅れてしまう。甲状腺がんというのはいま、日本では子どもはゆっくり進むと言われていて、僕はびっくりしています。現地では子どもは早く進むということはずっと聞かされて

いました。甲状腺がんにもいろいろな種類がありますが、ものすごく早く進んで確実に死に至るというものもあります。だからとにかく早期発見、これしかないのです。ところが現在、福島では2年経って、まだ検査も全然してない。心配ない、安心だ。それで2年間経っても大丈夫。そしてA1、A2判定する。A2判定の場合は、5ミリ以下の結節、あるいは20ミリ以下ののう胞の場合は心配ないということになって、再検査の必要もないと、そういうことも言われたりしている。それで、最低でも受けたければ2年に1回ぐらい検査やってもいいと。その時の指導しているのが山下俊一氏ですが、山下氏の師匠というのが長瀧重信で、長瀧氏は福島 of 事故が起こった時、官邸のホームページを管理していました。つまり、どのぐらい危ないのかということ、彼が全部政府に対して指導する役目でした。長崎大学医学部長。長瀧氏の弟子筋にあたる教授が山下氏、それが福島市、福島県 of 安全管理アドバイザーになっていくわけです。そしてその長瀧氏の師匠は誰かといったら、その前の理事長であった人間が彼の師匠で、それは重松逸造氏です。IAEA of 調査団 of 代表で「あそこは何もありません、心配ありません、病気も起こりません、子どもたちにも甲状腺がんは起こりません」と言ったのが重松氏です。【次号に続く】

(注) 当日、別の国際会議のために来日中のウクライナコロステン市長が、ウクライナ大使館職員とともに来場。広河さんの講演前、短い挨拶の中で、「チェルノブイリの(環境)状況について・・・自分は楽観主義に立っている」と述べたのを受けて。

<木村氏・広河氏の講演録：文責 向井>



## ボランティアに参加して

平成国際大学法学部3年 白藤剛志

広河さんは、チェルノブイリの経験と使命に燃えた執念と行動力で沖縄の球美の里を立ち上げ、子供の保養をスタートさせた。もっと大きな力を結集していかなければならない。(60代男性) ◆広河さんの「楽観できない」から始まった講演に息をのみました。私ももっと勉強しできることをやらなくては。(60代) ◆木村さんのお話は丁寧で分かりやすかった。様々な体系的な知識を持って判断することが大切だと分かったが、同時にそのような考え、事実を知ろうとアンテナをめぐらす必要があると感じた。広河さんのお話は詳しく、正義感に満ちあふれていて心に響いた。彼の生き様と福島の実状が明白に解決、救済すべき人々を映し出していた。(30代女性)

### <絵画・写真展来場者の感想>

◆通っている学校が後楽園駅の近くで、度々ここで絵の展示を行っているのを見ていたが、今日は時間があつたため初めて寄ってみた。絵の鑑賞が好きだという単純な理由だったが、テーマが”チェルノブイリと福島”ということでもっと考えさせられた。具体的に言うと、私より年下の子どもたちが命や原発という重いテーマで現実を伝えている、何よりこのような絵が描けてしまうということ。見ることでよかった。(10代女性) ◆チェルノブイリの悲しみが絵から伝わってきました。日本の福島でも起きてしまったんですね。これから何十年と悲しみが続いていくかと思うと胸がしめつけられます。微力ながらも私にできることをやっていきたいと思いました。(50代女性) ◆文京区で展覧会を開いて下さりありがとうございました。福島関連の書籍、雑誌も読ませていただきました。(60代男性) ◆原発の恐ろしさをただただ知ることができました。(20代女性)



に希望を持ってほしいという思いに感動しました。そのため、基金の方達と一緒に、大学のサークルのみならずボランティアを試みたいと思いました。「絵画&写真展 チェルノブイリと福島」展示会の手伝いをしている時に、ベラルーシの子供が描いた鶴の絵を観て心が洗われる気がしました。広島、長崎、チェルノブイリ、福島事故という不幸によってですが、その悲しみの深い繋がりができていることを知りました。4/26の講演会には会場が満員になるほどの来場者が訪れ、自分よりも遥かに問題意識の高い方ともお話することができました。被災者に対してこれほどの人が関心を持っていることがわかり、日本人は決して無関心ではないのだと安心しました。

手伝いが終わった後に基金の方に「物理的に援助していただけることももちろんだが、それよりも福島やチェルノブイリで起こった事故に関心を持ち手伝いに来てくれる気持が嬉しい」と言っていただき、私達にできることは<15頁へ続く>➔

ベラルーシ ミンスク州 ビレイカ地区

子ども健康回復センター「希望21」

期間：5/20～5/31 参加者：8家族 18人（子ども

8人：3～9歳、大人10人：20～36歳）



「チェルノブイリ被害者家族の保養」は、今年で6年目です。参加した母親7人と父親1人は、子どもの頃甲状腺の手術を受けた人たちです。彼らには生涯ホルモン剤の服用と定期検査が欠かせません。彼らの子どもたちの診断名は次のようなものです。慢性気管支炎（7歳・女・ゴメリ市）、先天性心臓病（5歳・男・ゴメリ地区ドーブルシ市）（3歳・男・レチツァ市）、再発性咽喉頭気管支炎（4歳・男・ミンスク市）（7歳・女・グロドノ州ノヴォルグレードク市）。子どもたちは全体的に免疫力が低く、風邪をひきやすいなどの共通の症状があります。「今年の参加者のうち、重い気管支炎の子どもが一人います。完治は難しく、将来は肺の病気になるかもしれない、とても注意が必要です。このセンターでできる治療は受けましたが、保養が終わってからも、半年に一度は専門医の検査を受けるよう、母親に話しました」と、センターの小児科医オリガは話します。

参加者はそれぞれの健康状態に応じ、運動療法、マッサージ、水圧療法、塩治療、歯科治療、薬草療法等を受けました。子どものための教室（陶芸、折り紙、手芸）には、



親たちも一緒に参加。特に陶芸教室は子どもたちに大人気でした。親たちのための教室（医療、心理、教育、栄養に関するもの）も行われました。親子で参加できるスポーツ大会やゲーム大会などの催し物などもありました。これまで家族を受け入れてきたセンター側の経験と、過去に参加した家族たちからの要望を取り入れているため、毎年充実した内容になっています。参加者たちはみな保養に大満足でした。参加者同士も仲良くなり、一人の父親が全員の子どもの面倒をみたり、一番年上の男の子が、小さい子どもの面倒をみたりしていました。ある母親は、「ここでは自分の子どもの姿が近くに見えなくても何も心配していなかった。必ず誰かがそばにいて見てくれている事がわかっていたから。みんなが子どもたちの共通の親のようで、子どもたちもきょうだいのようにした」と話しました。充実した施設、多くの楽しい催し物だけでなく、職員のあたたかく的確な対応を参加者が高く評価していました。今回参加した3人の母親と1人の父親は、10代の頃「子ども基金」の招待によりこのセンターで保養をしました。その頃の思い出を話したり、今も働いている職員と懐かしい再会を果たしたりしていました。全員が口を揃えて、「ここで保養をしたことは子ども時代の最も楽しい思い出のひとつになっている。今は当時より一層素晴らしい施設になっている」と言います。夫と娘と3人で参加したターニャ

（29歳）。「妊娠した時、地元（ゴメリ州チェルensk市）の病院では、出産は無理だと言われました。諦めかけていた時に救援団体の代表者に相談したところ、ゴメリ市の病院を紹介してもらい、無事出産しました。あの時最初の医師の言うことを聞いていたら、今私たちの隣にダーシヤ（3歳）はいなかったのです。娘が生まれてくれたおかげで本当に幸せです」同じ町出身の夫（28歳）は先天性心臓病です。

## 2013年6月 家族訪問 ベラルーシ(1)

報告 佐々木真理

ベラルーシの慈善団体「困難の中の子どもたちへ希望を」には、さまざまな病気の子どもの入会が後を絶ちません。チェルノブイリ原発事故から27年、汚染地域に住み続ける人たちは、放射能とどのように向き合っているのか、子どもたちにはどのような影響があるのか、報告します。

\*~\*~\*~\*~\*~\*~\*~\*~\*~\*~\*~\*~\*~\*~\*~\*~\*~\*~\*~\*~\*~\*~\*

K・ニキータ 2002年生まれ  
ゴメリ州ナロヴリャ市

右腎芽細胞腫。2002年に右の腎臓を摘出。

母親ナターシャ（1969年生まれ）の話「妊娠中、何か様子がおかしいと言われました。生まれたとき血液検査を受けて病気がわかり、すぐに手術が必要となりました。見た目は、太っていて健康そうですが、ニキータは病気だらけなんです。汚染地区に住んでいるのに、病気はチェルノブイリとの関連が認められていません。ニキータは走った後など、背中や尾骨が痛いと言います。たくさん水分をとりますが、それでも長い間排尿がありません。手術後は、他の子どもが病気のことを知らない、別の学校に転校させました。体を動かすことが好きだったのに、体育をしてはいけないといわれて泣いていました。薬草の薬をいやがるので、スープに混ぜたりしています。ビタミン剤はゴメリの慈善団体からもらっています。この町の子どもたちは、1年に1度、学校からサナトリウムに保養に行っています。息子は釣りが好きで、近くの川によく釣りにいっています。長男（22歳）は脳に腫瘍がみつかりました。次男は専門学校を卒業したばかりです。警官になりたかった



のですが、健康診断で心臓の問題と、右耳がよく聞こえないことがわかりました。小さい頃からなりたかった職業でしたから、本人はとても落胆しています。

毎年4/26には、チェルノブイリ事故の事を思い出す催しが、町で行われます。でも実際、その後どうなっているかなど、本当のことは知らされていません。今はもうきれいだから大丈夫と言うだけで

す。町から30キロも行けば、ゾーンの入り口。そこから先は許可がなければ入れません。ここだって放射能があるのはわかっています。（「このことを公に言うことはできません」と、同行した慈善団体の代表者は言います。）心ではわかっているけれど、ここで暮らし、子どもを育てていかなければならないのです。私は町の病院で22年間看護師をしています。女性性は、乳がん、子宮ガンが増えました。他に結核なども多いと思います。私自身は、これは全部チェルノブイリのせいだと思います。祖母は長生きでした。95歳で亡くなるほんの少し前まで、畑仕事や家畜の世話をしていました。

チェルノブイリ事故のとき、変な雲が現れ、空がおかしな感じになり、何かとても恐ろしかったことをよく覚えています。最初の1・2

日目は何が起きたか何もわかりませんでした。もし今後、4号炉に何かあったら、こんな近くに住んでいてどうなってしまうのだろう、と思います。事故後、この町の住民に首から下げる放射線測定器が配られ、結果はミンスクへ送られました。でも、それだけ。私たちには結果を知りません。その後は何の検査もされていません。ナロヴリャはとても大きな地区で、たくさん住民がいました。高濃度汚染地からの移住が始まって村がなくなっていき、事故以前に比べて住民は減りました」横から父親が口を挟みます。「ミンスクなどに移住させられた人たちは早死にして、ここに残っている住民のほうが長生きだよ。放射能なんか気にしていないよ。魚を食べていれば健康だよ」ナターシャは、魚釣りばかりで家族を顧みない夫を苦々しい顔で見つめていました。

L・ユーラ 2001年生まれ  
ゴメリ州ジロービン地区

左後縦隔の神経芽細胞腫。  
下顎部リンパ節への転移。

母親リュドミラ（1970年生まれ）の話「ユーラの病気がわかったのは、小学校に入る前の健康診断のときでした。腎臓がおかしいと言われ薬を渡されました。その後、足が痛くて歩けなくなりました。町の病院の検査では背骨などに異常はありませんでした。ゴメリ市の病院で検査を受けると、すぐにミンスク市の小児がんセンターに送られました。初めは結核を疑われましたが、検査の結果、本当の病気がわかりました。2007年8月のことです。骨



髄移植が行われました。やっとこれから健康に向かっていくと思っていたら、2010年8月、さらに2012年4月に再発。辛くて悲しくて、本当にどうしてよいかわからず、毎日教会にお祈りに行きました。昨年9月も治療のため入院しました。5年間治療を続けています。小児がんセンターでの治療は無料ですが、吐き気止めの薬はロシア製のため、自分たちで買わなければなりません。1カ月分で約350ドルです（注：ベラルーシ製の薬は無料で処方されることが多い）。難聴がありますが、それは化学療法の後遺症によるもので、薬を飲んでいけばよくなると言われていました。手術後、しばらく学校に通えず、自宅学習をしていました。息子はよく、“もう薬はいやだ、前みたいにホッケーをしたい、プールに行きたい”などと言っていました」母親は時折涙声になりながら、最後に「二人目の子どもは考えていない」と話しました。

この村にはチェルノブイリ事故後、避難民のための住宅が建てられました。父親は高濃度汚染地からの避難民でした。両親は村の農場で働いていますが、農場の仕事以外にも、自分の家の畑や家畜の世話もあります。「野菜や卵、肉は自分のうちのものを食べています。路上で売っているキノコは買いません。買うのは店で売っている放射能検査済のものだけです」

部屋にいるときのユーラは顔色も悪く、元気がないように見えて心配しましたが、あとで近所の友達が誘いに来て、外に遊びに行きました。その時のうれしそうな笑顔を見て、少しほっとしました。

# \*\*\*\*\* 募金・救援状況 \*\*\*\*\*

## ●募金状況 2013年3月～5月

|               | 3月             | 4月             | 5月             |
|---------------|----------------|----------------|----------------|
| 募金件数          | 201件           | 140件           | 74件            |
| 救援寄付金         | 669,864        | 467,087        | 434,523        |
| 保養費           | 98,000         | 56,500         | 49,000         |
| 特別保養費         | 70,000         | -              | 70,000         |
| 里子支援          | 43,780         | 14,690         | 140,870        |
| ニュース購読費       | 48,000         | 40,000         | 26,000         |
| 27周年救援イベント賛同金 | 66,000         | 53,500         | 5,000          |
| <b>合計(円)</b>  | <b>995,644</b> | <b>631,777</b> | <b>725,393</b> |

☆他に、現物寄付として(図書カード)500円分

## ●救援状況 2013年3月～5月 (単位:円)

### <ウクライナ>

#### ◎子どもたちの生存

|                    |           |
|--------------------|-----------|
| 保養費                | 1,186,320 |
| 運営費(スタッフ給料、通信費、家賃) | 483,024   |

### <ベラルーシ>

#### ◎希望 21

|                        |           |
|------------------------|-----------|
| 保養費(後半分)               | 2,696,879 |
| 特別保養費(家族の保養、子どもの保養前半分) | 1,248,199 |

#### ◎チェルノブイリのサイン

|                 |        |
|-----------------|--------|
| 医薬品             | 45,618 |
| 運営費(スタッフ給料、通信費) | 63,585 |

### <11頁からの続き>

本当に小さなことでしたが、それでも必要としてくれているということに喜びを感じ、ボランティアの意義というものがあった気がしました。

震災後、直接の被害は少なかったものの、自分の中で何かぼっかりと穴の空いた様な感覚があったのですが、ボランティアをしたことによって、海外の人も含め沢山の温かい人達がいることを知り、繋がりを持つことができ、その穴はととも浅く小さいものになりました。現在、被災者を取り巻く環境は良いものとは言えないと思いますが、それに決して負けない沢山の温かい心が福島の人達の希望になることを願ってやみません。



(平成国際大学からは、白藤さんを含めて5人がボランティアに参加してくださいました。)

## チェルノブイリ 27周年救援キャンペーン 「チェルノブイリと福島子どもたち」 絵画展&写真展/講演会

募金額 380,801円

多くの方にご来場、ご協力いただきましたことを心よりお礼申し上げます。

- ♥チェルノブイリ子どもへの支援 190,401円
- ♥福島子どもへの支援※ 190,400円

※未来の福島子ども基金を通して活用されます。

収益は以上のようにさせていただきました。収支報告については下記の表をご覧ください。

| チェルノブイリ27周年救援キャンペーン 収支報告 |                |           |                |
|--------------------------|----------------|-----------|----------------|
| 収入                       |                | 支出        |                |
| 入場料                      | 511,000        | 講演会       |                |
| 賛同金                      | 122,500        | 会場費       | 36,650         |
| 会場募金                     | 100,931        | 舞台費       | 75,000         |
| 物販益                      | 68,715         | 写真展       |                |
|                          |                | 会場費       | 28,050         |
|                          |                | パネル利用料・送料 | 57,087         |
|                          |                | 共通経費      |                |
|                          |                | 印刷費       | 87,222         |
|                          |                | 発送費       | 108,425        |
|                          |                | 事務費       | 17,551         |
|                          |                | 交通費       | 12,360         |
| <b>小計</b>                | <b>803,146</b> | <b>小計</b> | <b>422,345</b> |
|                          |                | <b>募金</b> | <b>380,801</b> |
| <b>合計</b>                | <b>803,146</b> | <b>合計</b> | <b>803,146</b> |

## ♥ 募金団体名一覧 ♥ (順不同・敬称略)

紙面の都合上、個人名は省略させていただいております。みなさまに心より感謝申し上げます。

【3月】東京一般労働組合東京音楽大学分会/うえのはらりサイクルの会/カトリック徳田教会/照恩寺/(株)ジョイメイト/覚正寺/まほろば/東京平和運動センター/特定非営利活動法人 広河隆一非核・平和写真展開催を支援する会/トランスフェリックマネジメント/片倉教会教会学校

【4月】北陸学院中学校/(有)ユーロアール/トランスフェリックマネジメント/東用堂治療院/特定非営利活動法人 広河隆一非核・平和写真展開催を支援する会/横浜長老教会/(株)ジョイメイト/小池音楽教室/ケイ歯科クリニック

【5月】おはなしのいえ/トランスフェリックマネジメント/(株)ジョイメイト/常盤平幼稚園PTA/

★里親のページ、黒部ドクターのお話、福島便り、それぞれ紙面の都合により、休載します。

# 事務局から

## ■ボランティア募集

◎ニュース発送作業(年4回:3・6・9・12月)

次回 日時:9/21(土)午後1時～4時頃まで

場所:東京ボランティア・市民活動センター

(飯田橋駅ビル セントラルプラザ 10階)

※日程が変更になる場合もありますので、ボランティア参加希望の方は、前日までにご連絡ください。

【問い合わせ】平日午前10時～午後5時 留守の場合は伝言をお願いします。T&F 03-5228-2680

◎事務局での平日・土曜日のボランティア作業は不定期に行っています。前もってお問い合わせください。

## ■「基金ニュース」について

募金をくださった方には、使途の報告としてニュースレターをお送りしています。また、ニュースレター購読費(2,000円/年)も募っております。印刷・発送などの経費の残金は、募金として使わせていただきます。

### ～\*～\*～\*～ 里親募集 ～\*～\*～\*～

チェルノブイリ原発事故による放射線汚染地区に暮らしている病気の子どもへの医療・生活を支えるために、月50ドル相当を最低2年間、支援して下さる方を募集しています。詳しくお知りになりたい方は事務局へお問い合わせください。資料をお送りいたします。現在、支援を待っているのは、ベラルーシの子どもです。M・ポリーナ/9歳/右眼球の腫瘍

≪甲状腺がんが転移して昨年亡くなったミーシャ(ウクライナ)の父親が来日≫シテフォルク・ワレンチンさんが、「原発を問う民衆法廷」に特別申立人の一人として意見陳述のために来日、「未来の福島子ども基金」の総会にもゲストとしてお話されます。

## ★「原発を問う民衆法廷」

7/20(土)13:00～18:00・7/21(日)11:00～17:00 新宿区笹塚区民センターホール(都営大江戸線牛込神楽坂0分 参加費:1日券1000円・2日通し券1800円(連絡先)090-2466-5184(矢野)FAX 045-434-4225

## ★「未来の福島子ども基金」総会

7/19(金)19:00～21:00 参加無料

1部:総会(決算・活動報告および今後の取組みについて)2部:講演会(シテフォルク・ワレンチンさん)

場所:カタログハウス セミナーホール 地下2階(新宿駅南口下車10分) 主催:未来の福島子ども基金

協力:チェルノブイリ子ども基金

問い合わせ [fromchernob0311@yahoo.co.jp](mailto:fromchernob0311@yahoo.co.jp)

090-3539-7611

いつもあたたかいご支援をありがとうございます。振込用紙と領収証につきまして、みなさまにお知らせとお願いです。

### すべての方に振込用紙を同封しております

事務作業の都合により、まことに勝手ながらすべての方に郵便払込用紙をお送りしております。決して募金を強要するものではありません。また、すでに通信費・寄付金を納入された方はどうぞご容赦ください。

### 払込取扱票のお名前・ご住所は楷書でご記入ください

郵便局からは払込取扱票のコピーが届きます。文字がかすれて判読しづらい場合がございますので、楷書でわかりやすくご記入ください。

### 「受領確認の葉書」をご希望の方へ

通信費・寄付金を納入された方で、受領確認の連絡をご希望の方には、葉書(金額は記載せず)をお送りします。振込用紙の該当欄に印をつけてください。

### 「領収証」が必要な方へ

郵便局払込取扱票の「払込受領証」は公に認められる領収証です。大切に保管ください。別途領収書がご入り用の際はお申し出ください。

第6期理事会 2013年4月～2015年3月

代表理事: 向井雪子

理事: 大戸清一 小寺隆幸 齋藤武光  
佐々木真理 中務俊之

監事: 清水玲子 鈴木由利子

顧問: 黒部信一

上記のような体制になりました。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

## ●チェルノブイリ子ども基金 NEWS 年4回発行●

〒162-0816 東京都新宿区白銀町25 メゾンド原207号室 Tel/Fax 03-5228-2680

ウェブサイト=<http://www.smn.co.jp/cherno/index.html> e-mail: [chernob1986@tokyo.email.ne.jp](mailto:chernob1986@tokyo.email.ne.jp)

事務局ブログ ◇神楽坂事務局だより <http://blog.goo.ne.jp/cherno1986jimukyoku/>

※当基金は任意団体のため、ご寄付は税金控除の対象とはなりません。ご了承ください。